仙台市文化財調査報告書第97集

仙台平野の遺跡群Ⅵ

——昭和61年度発掘調査報告書——

１９８７年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第97集

仙台平野の遺跡群Ⅵ

——昭和61年度発掘調査報告書——

１９８７年３月

仙台市教育委員会

序　　文

近年、文化や歴史的事項に関する市民の意識は、少しずつその高まりをみせてきており、新しい都市像を育むなかで、それらの資源を積極的に取り込もうとする傾向が生まれようとしている息吹を感じます。

埋蔵文化財の発掘調査は、仙台城下町時代以前の歴史を解明するのに積極的に貢献する方法として不可欠な手段といえますし、また徐々にではありますが、その大切さについても理解が深まりつつあることは大変意義深いことと考えます。

ここに報告する内容も、昭和61年度実施した発掘調査の成果の公開であります。この内容にも表われていますように、新しい史実として受けとめられるような事柄も顔をのぞかせています。こうした調査に関しましては、多くの市民の方々や有識者の御支援があってのことと深く感謝を申し上げる次第です。文化財保護行政はどうしても市民のこうした理解があってこそ成り立つものと考えます。毎日毎日の変化の激しい昨今ですが、精一杯頑張りたいと思います。今後の皆々様の御指導、御支援を切にお願い申し上げ、刊行のご挨拶といたします。

昭和62年３月

仙台市教育委員会
教育長　藤　井　　黎

例　　言

1．本書は、昭和61年度国庫補助事業の緊急遺跡範囲確認事業に伴う「仙台平野の遺跡群」の発掘調査報告書である。

2．本書の作成は、次のとおり分担して行なった。

本文執筆……松本清一・結城慎一・木村浩二

遺構実測図トレース……結城・鈴木雅文

遺構写真……結城・松本

遺物写真……木村・高橋義明

遺物採拓……赤井沢進・赤井沢千代子・小野寺　雄

編　　集……結城・松本

3．本書中、郡山遺跡の調査報告は略報とし、詳細については、仙台市文化財調査報告書第96集「郡山遺跡Ⅶ～昭和61年度発掘調査概報」の中にまとめた。

4．本書中では「富沢水田遺跡」を「富沢遺跡」と改称して呼称している。これについては、昭和62年3月20日付で、宮城県教育庁文化財保護課へ文書にて届出している。

5．本書中の土色については「新版標準土色帖」（小山・佐原：1973）を使用した。

6．本書中で使用した地形図は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1「仙台南西部」、仙台市仙塩広域都市計画図2千5百分の1、5千分の1である。

7．実測図中の水糸高は標高で示してある。

8．実測図中の方位は磁北に統一してある。これは、仙台では、真北に対して西偏7°20′である。

9．本調査は、昭和61年5月に着手し、昭和62年3月に終了した。

目　　次

序　文
例　言

Ⅰ．調査計画と実績……1

Ⅱ．発掘調査報告……3
〔1〕陸奥国分寺跡……3
1．遺跡の位置と環境　2．調査経過　3．発見遺構・遺物　4．まとめ

〔2〕史跡陸奥国分尼寺跡……5
1．遺跡の位置と環境　2．調査に至る経過　3．基本層位　4．発見遺構
5．出土遺物　6．まとめ

〔3〕富沢遺跡……13
1．遺跡の位置と環境　2．調査に至る経過　3．基本層位　4．発見遺構と遺物
5．まとめ

〔4〕郡山遺跡……17
1．第60次発掘調査　2．第61次発掘調査　3．第62次発掘調査
4．第66次発掘調査　5．第67次発掘調査

Ⅰ．調査計画と実績

仙台市内には、現在400箇所を越える周知の埋蔵文化財包蔵地がある。これらは、私達の祖先が残した貴重な文化遺産であり、過去の人間の生活の証でもある。この文化財を保護し、市民生活の中で活用しながら、後世の人々に伝えていくことは、私達の責務と言えよう。

ところで、この周知の埋蔵文化財包蔵地に関わる開発等の届出件数は増加の一途をたどっており、今年度は400件を若干越えそうである。そこで、当教育委員会では、上記の届・通知の一部等について、昭和56年度から国の補助を受けて「仙台平野の遺跡群」の発掘調査を実施し、市内の遺跡の範囲確認、性格究明を行なってきた。

今年度は４遺跡８件の調査を下記のとおり実施した。

１．目　　的　個人住宅の建築に伴う発掘調査及び重点遺跡の範囲確認、性格究明の調査

２．調査面積　734㎡

３．調査体制

調査主体　仙台市教育委員会

調査担当　仙台市教育委員会文化財課調査係

（課長）早坂春一　（係長）佐藤　隆　（主事）結城慎一・金森安孝

（教諭）松本清一

同課管理係

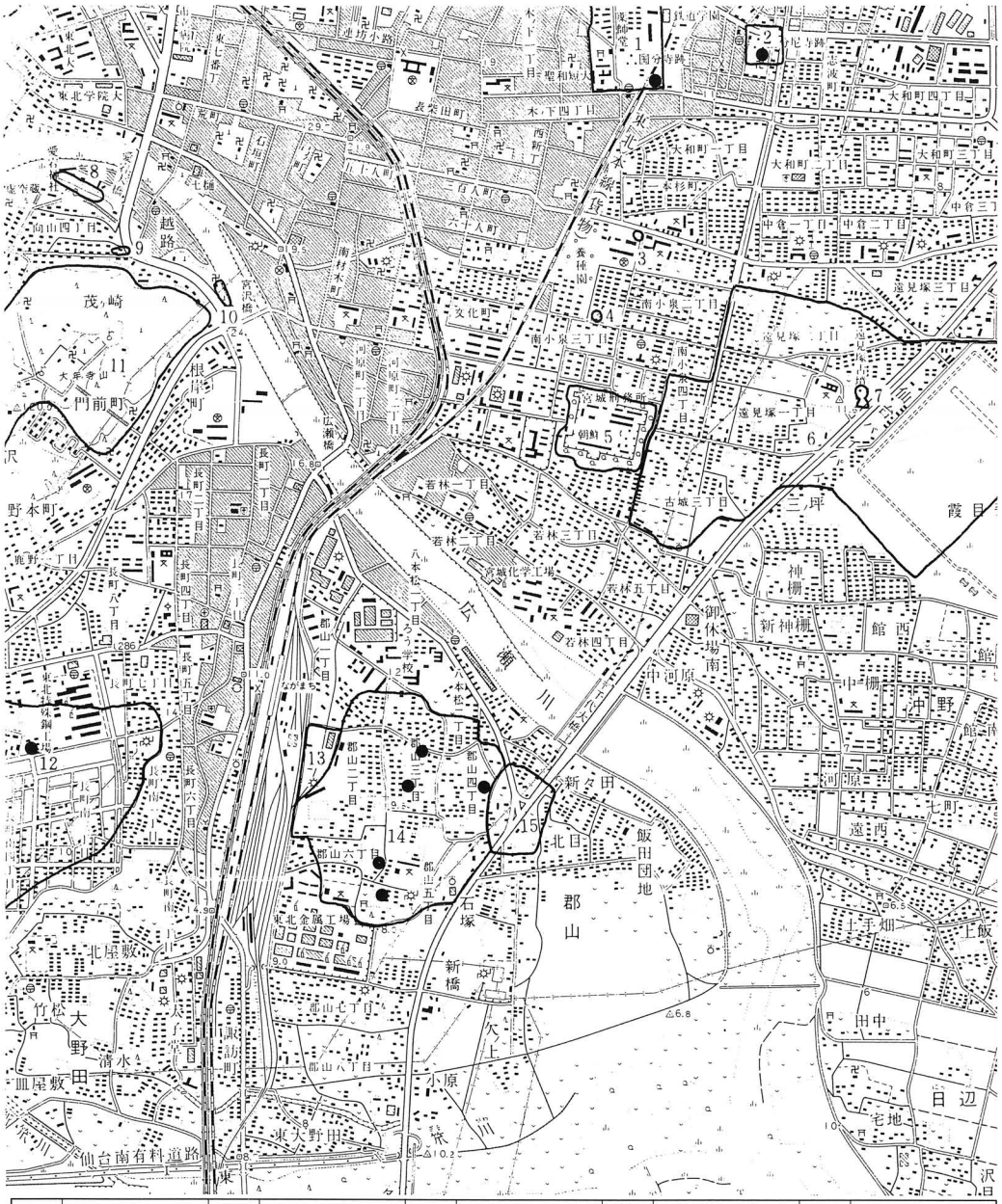
（係長）佐藤政美　（主事）岩沢克輔・山口　宏　（技師）桑島栄男

調査協力（曹洞宗国分尼寺住職）小枝仙涯

調査・整理参加者　大友義信・小野寺雄・小林　充・山田　太・佐藤浩道・庄子信哉・小山羊右・鈴木正道・赤井沢千代子・赤井沢　進・鈴木雅文・鈴木　進・樋口　敦・片平聖一・小国和男・高橋義明・桜井　乾・千葉　一・糸谷明子

第１表　発掘調査実績表

遺跡名	所在地	申請者住所	申請者名	調査事由	調査面積	調査期間
陸奥国分寺跡	木ノ下三丁目７～４	木ノ下三丁目16～16	村上　松男	住宅新築	15㎡	６月６日～６月11日
陸奥国分尼寺跡	白萩町309	―――	―――	範囲確認	93㎡	12月１日～12月26日
富沢遺跡	長町七丁目23～12	宮城野八丁目７	石塚　恒夫	住宅新築	18㎡	５月８日～５月21日
郡山遺跡	郡山三丁目128～50	郡山三丁目16～８	中屋敷　真	〃	50㎡	５月６日～５月10日
〃	郡山三丁目118～１	郡山三丁目19～21	庄子　勇	〃	370㎡	５月６日～６月16日
〃	郡山六丁目231	郡山二丁目11～17	庄子　善重	〃	130㎡	６月13日～９月12日
〃	郡山五丁目148～11	五十人町８番地	風間　幸孝	〃	38㎡	11月12日～12月３日
〃	郡山四丁目228～1.2	郡山四丁目13－３	沼田権右衛門	寮・新築	20㎡	12月16日～12月17日



No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名
1	陸奥国分寺跡	4	猫塚古墳	7	遠見塚古墳	10	宗禅寺横穴群	13	西台畑遺跡
2	陸奥国分尼寺跡	5	若林城跡	8	愛宕山横穴群A	11	茂ヶ崎城跡	14	郡山遺跡
3	法領塚古墳	6	南小泉遺跡	9	愛宕山横穴群C	12	富沢遺跡	15	北目城跡

第1図　遺跡位置図　（●印は調査地点）

II．発掘調査報告

〔1〕史跡陸奥国分寺跡

1．遺跡の位置と環境

史跡陸奥国分寺跡は国府多賀城跡から南へ約10km、仙台駅の南東約2.5km離れた、仙台市木ノ下にある。標高16～17m のこの地は、広瀬川によって形成された河岸段丘最下段の下町段丘にあたる。

周辺には、弥生時代以降の集落跡である南小泉遺跡、仙台東郊条里遺構、遠見塚古墳、法領塚古墳などがあり、陸奥国分寺や国府多賀城に瓦を供給した台ノ原・小田原古窯跡群が北の丘陵地帯に広がっている。また、周辺一帯は、歌枕で著名な「宮城野」の地であり、10数年前までは田畑が広く残されていたが、現在は住宅が密集してきている。

2．調 査 経 過

史跡陸奥国分寺跡は大正11年の史跡指定以来、数次にわたり調査が行なわれ、調査に基づいた環境整備が計画的になされてきている。

今回の調査は、昭和61年５月７日付で、仙台市木ノ下三丁目16－16村上松男氏より、住宅を建築する旨の現状変更届が提出されたことによる。現状変更に該当する箇所は、史跡陸奥国分寺跡の東南の角にあたり、同寺院跡に関連する遺構の存在が十分考えられるため、遺構確認の調査を実施することになった。（第２図）

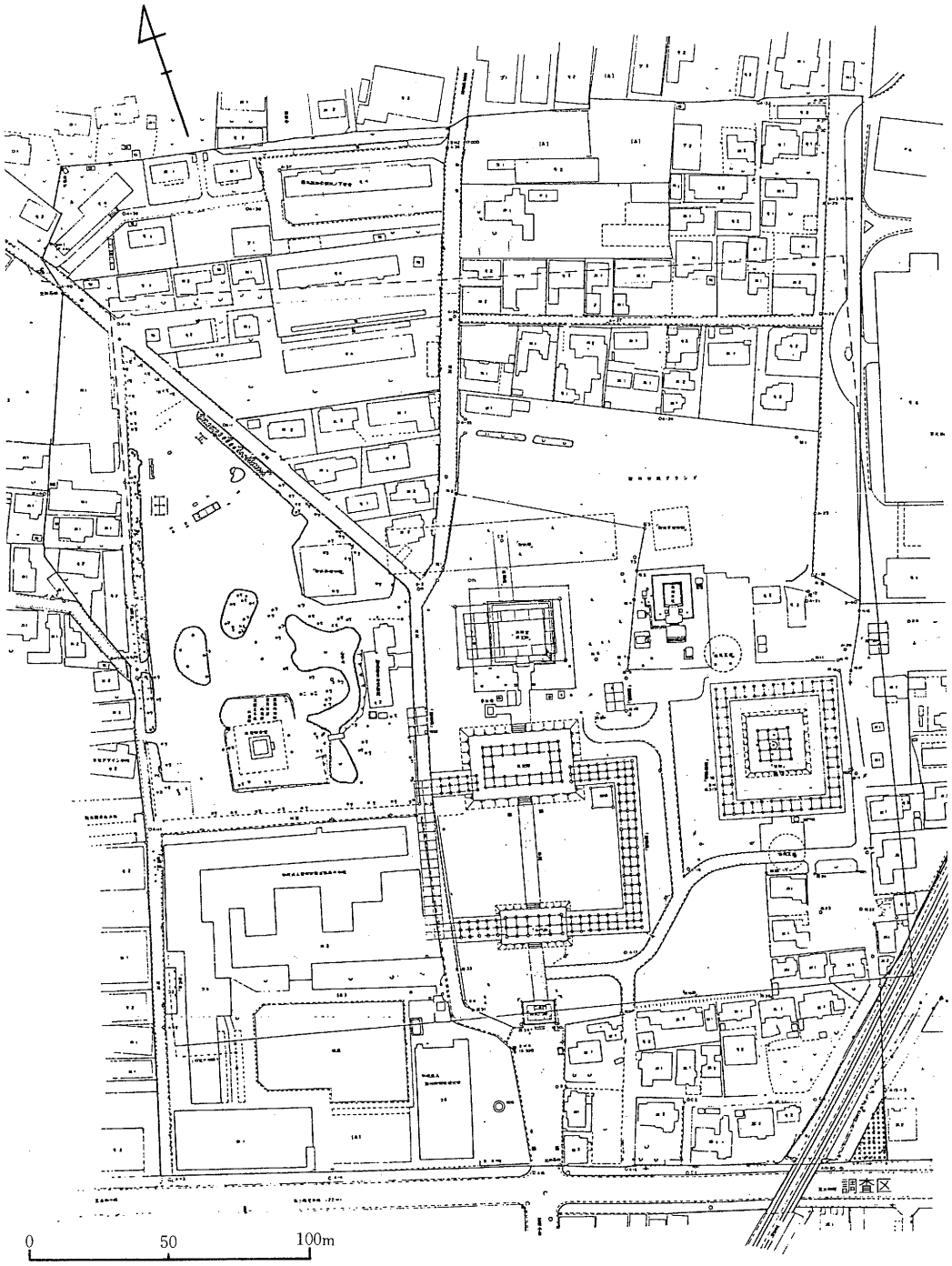
3．発見遺構・遺物

地表から50～70cmの深さまで攪乱が及び、薄い黄褐色ローム、その下の礫層の地山まで達している。検出された古代の遺構はなく、遺物の出土はなかった。

4．ま と め

今回の調査では、何ら古代の遺構を検出できなかったが、もともと遺構が存在しなかったものか、遺構等が削平されて発見されないものかの詳細は不明である。ただ、このような状況は国分寺跡南辺東部にみられる共通点である。

（松本清一）



第２図　陸奥国分寺跡と調査位置

〔2〕史跡陸奥国分尼寺跡

1．遺跡の位置と環境

陸奥国分尼寺跡（仙台市文化財登録番号Ｃ－420）は、仙台市白萩町・宮千代一丁目に所在する。この地点は、東北本線仙台駅の東南東約2.5km、陸奥国分寺跡の東600m にあたる。

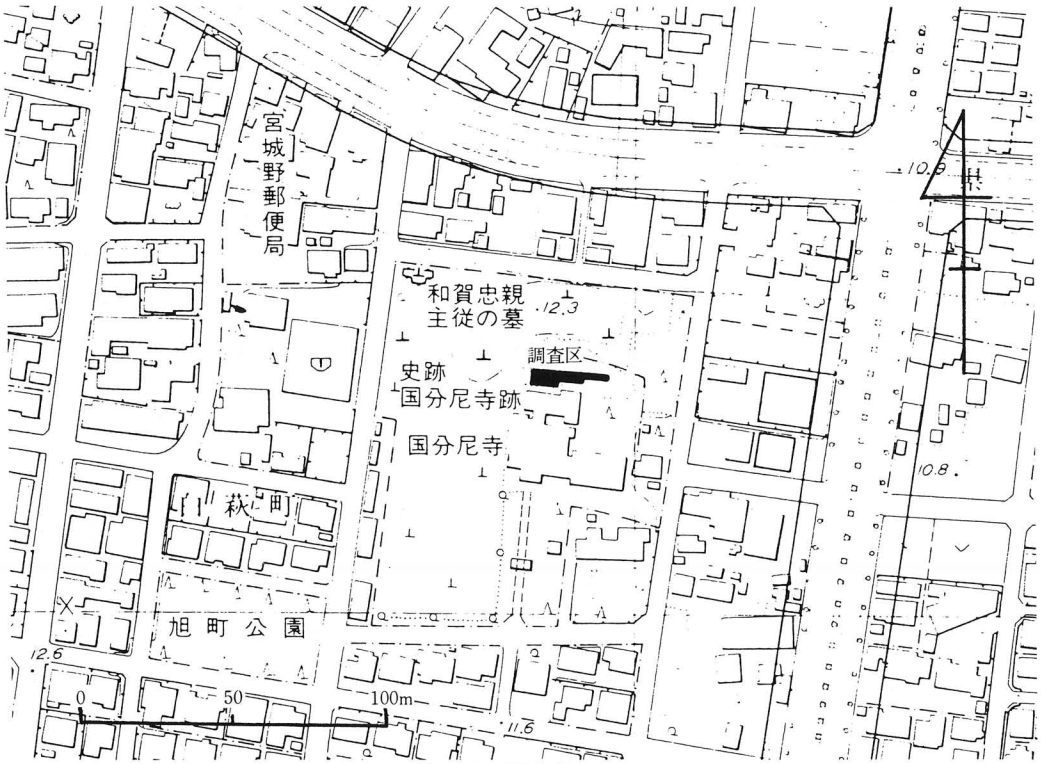
標高11m 前後の本遺跡は、名取川の支流である広瀬川が形成した河岸段丘中の下町段丘縁辺部である「宮城野海岸平野」（註１）の西端にあたる。また、「霞ノ目低地」（註２）の最奥部の自然堤防上に立地する。

周辺の遺跡には、陸奥国分寺や本遺跡に瓦を供給していた台ノ原・小田原窯跡群が、北方約３kmにある。また、南方には南小泉遺跡（弥生時代～近世）・遠見塚古墳・法領塚古墳（古墳時代）などがある。西方600m には陸奥国分寺跡がある。

今回の調査地点は、史跡指定地の南西15m 、仙台市白萩町309（現国分尼寺境内）に位置する（第３図）。

2．調査に至る経過

本遺跡は、古くから古瓦が現在の曹洞宗国分尼寺内とその周辺に散布していた。また、昔から観音塚があったことなどから、陸奥国分尼寺跡であるとされていた（註３）。昭和39年には



第３図　調査位置図

伊東信雄氏を担当者として、仙台市教育委員会が主体で実施された発掘調査により、従来から観音塚として呼ばれてきたものが金堂と推定され（註４）、昭和42年には公有化、翌43年には環境整備が行なわれた。整備に伴って、観音塚中央部の調査を行なった。また、昭和51年には推定金堂跡東隣り、昭和59年には西隣りを発掘調査した。その結果、東隣りでは遺構が検出されなかったが、西隣りの調査では、掘立柱建物跡あるいは礎石立ち建物の基礎事業跡と考えられる遺構、瓦溜めを検出している（註５）。

国分寺、国分尼寺周辺は、昭和10年代から住宅化が進み、県道川内・南小泉線や荒浜・原町線の整備によって著しく状況が変化している。その県道が国史跡指定地の北側を東西に走っているため、古代の遺構の観察が困難な状況にある。尼寺跡の寺域については、推定金堂跡とされる観音塚を中心に、南西北を匚形に取り囲む様に道路があり、南・西の道路は旧七郷村と旧原町の町村界になっている。東側の推定線は不明だが、観音塚を通る推定中軸線で折り返すと東西幅約600尺（180～190m）、南北幅約800尺(240～250m）の地割が予想される（註６）。今回の調査は、この推定中軸線のすぐ東側、推定南辺より約100m 北の位置に、土地利用や排土の関係を考慮して、次のように調査区を設定した。東西７m ×南北６m のＡ区と、東西17m ×南北1.5～3.0m のＢ区を、東西壁が通るように設定し、国分尼寺内畑地の調査を昭和61年12月１日より開始した。

３．基 本 層 位

調査地点は、現在も寺の畑地として利用されており、深く耕作がおよんでいるほか、樹木の抜根痕もかなり見うけられた。基本層位は４層確認された。第１、２層は耕作土であるが、特に２層は天地がえし層である。第３層は黒色系のシルト層（旧表土）、第４層は地山で、黄褐色系のシルト層である。なお第２、３層とも木根や耕作による攪乱が著しい。

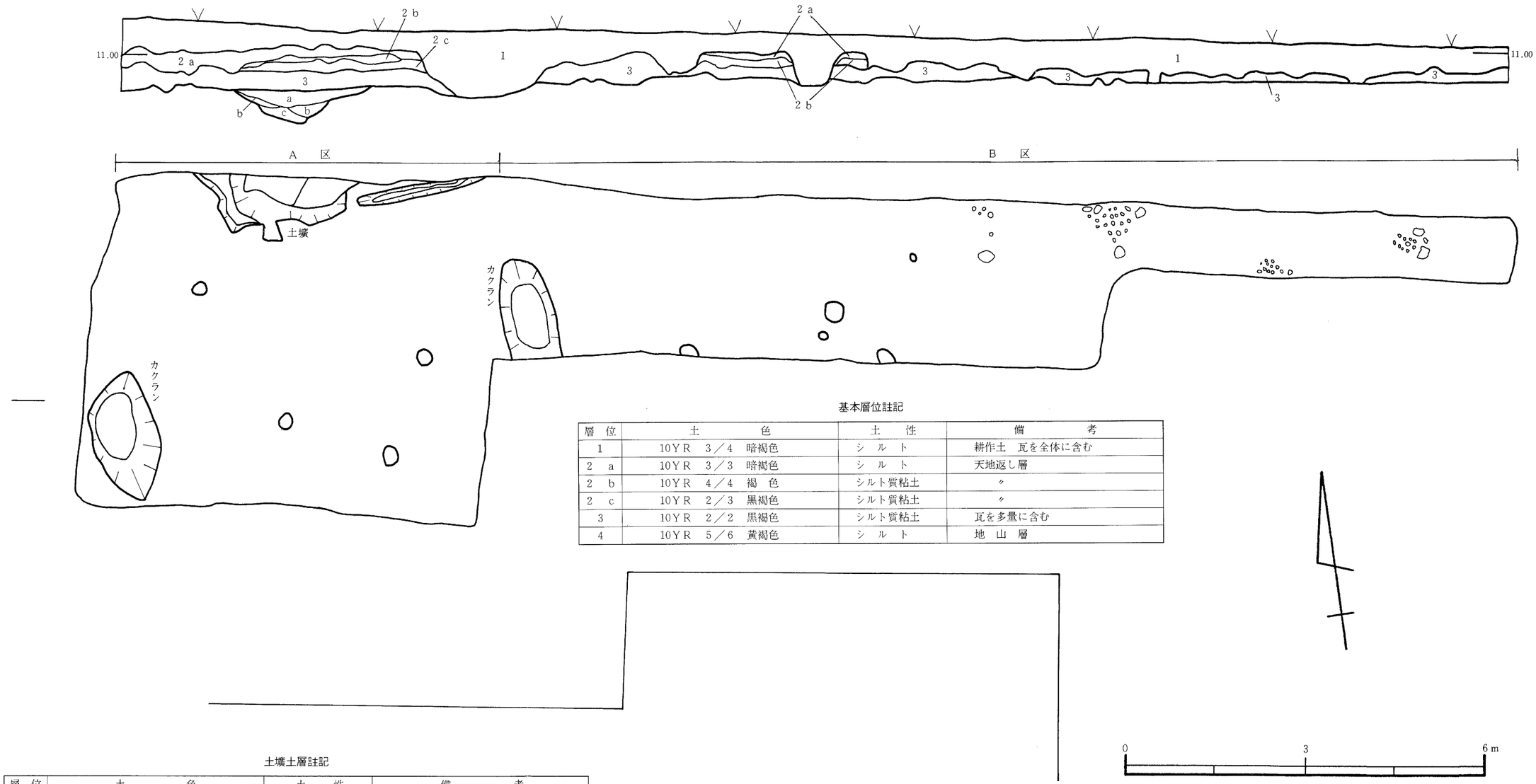
４．発 見 遺 構

Ａ区は木根による攪乱や耕作による攪乱が多く、若干のピット以外発見されず、そのピットも規格的な配置は認められなかった。Ｂ区東側には礫が散見される。礫の大きさは、おおよそ直径５～20cmのものである。特に４カ所に集中してみられるが、掘り込み面が攪乱されており、詳細は不明である。

５．出 土 遺 物

出土遺物は、コンテナ（テンバコ64）で７箱であり、Ａ、Ｂ区の遺構検出面から上層で６箱、検出面では１箱の割合いである。その内訳は、瓦片が大半であり、土師器、須恵器片は10数点である。また、土師器、須恵器も大半が小破片である。瓦片中には軒丸瓦片が４点ほど含まれているが、その多くは小破片であり、出土層も遺構面より上層である。

軒丸瓦　重弁蓮華文軒丸瓦が２点、宝相華文軒丸瓦２点である。(Ｆ－２）重弁蓮華文軒丸瓦



基本層位註記

層 位	土 色	土 性	備 考
1	10YR 3／4 暗褐色	シ ル ト	耕作土 瓦を全体に含む
2 a	10YR 3／3 暗褐色	シ ル ト	天地返し層
2 b	10YR 4／4 褐 色	シルト質粘土	〃
2 c	10YR 2／3 黒褐色	シルト質粘土	〃
3	10YR 2／2 黒褐色	シルト質粘土	瓦を多量に含む
4	10YR 5／6 黄褐色	シ ル ト	地 山 層

土壙土層註記

層 位	土 色	土 性	備 考
a	7.5YR 2／2 黒褐色	シルト質粘土	
b	7.5YR 2／2 黒褐色	シルト質粘土	10YR 4／6 シルト質粘土を粒状に含む
c	10YR 2／3 黒褐色	シルト質粘土	

第4図 平・断面図

写真１　調査区全景

写真２　北側断面の状況

（第５図４）は、８枚の蓮弁のうち２枚のみが残存する破片である。しかも中房の部分を欠落しており、その制作時期を特定することはむずかしい。（Ｆ－４）宝相華文軒丸瓦（第５図３）は、全体の３分の１程度しか残存していない。しかし内区周縁に珠文を欠いている状況などから、陸奥国分寺跡出土瓦の分類（註７）によれば、宝相華文軒丸瓦第二類になると思われる。その他の２点は小片であって、その詳細は不明である。

軒平瓦　軒平瓦も軒丸瓦同様に遺構検出面より上層で出土し、偏行唐草文軒平瓦と重弧文軒平瓦の２種類である。２種類とも完形ではないが、（Ｇ－４）偏行唐草文軒平瓦（第５図２）は、同分類によれば、その唐草文と珠文から、国分寺創建期の第一類であろう。また、（Ｇ－３）重弧文軒平瓦（第５図１）は、瓦当面の沈線と顎の鋸歯文から、偏行唐草文軒平瓦と同時期で重弧文軒平瓦の第一類とみられる。

丸瓦　粘土紐巻き作りの玉縁付丸瓦である。凹面には布目圧痕がある。凸面は縦位の縄目痕を横位にスリ消し（ナデ）たものと、縄目痕が認められず、縦位にヘラ状工具のナデ痕が見られるものがある。

平瓦　平瓦は、大・小の破片を取りまぜながら多数出土している。凹面では、布目圧痕を残すものと布目圧痕をスリ消し（ナデ）たものが出土している。布目圧痕をスリ消したもののほうが数が多いようである。厚さは、厚いもので24㎜、薄いもので18㎜である。凸面の方は大きく２種類に分けられる。１つは縄目タタキ痕が見られるもの、そしてもう１つは須恵器のように平行タタキ目痕をもつものである。縄目痕は、その縄目の間隔が約８㎜のものと、約３㎜のものがあり、縄の太さが異なる。縄目の太いものの方が多いようである。また縄目は、縦方向、斜め方向、そして交差しているタタキ目痕も見られる。平行タタキ目痕をもつ平瓦は全体の３分の１程度である。そのうちタタキ目の間隔の広いもの（約７㎜）が多く、狭いもの（約２㎜）は少ない。

道具瓦　隅平瓦片が２点と面戸付丸瓦片が２点である。

土器　小破片が10数点ほどである。土師器は坏片が多く、内外面とも黒色処理をほどこしているものが数点含まれている。その他、坏の底部を回転糸切りで切り離したもの等が出土している。須恵器は坏の小片が１点と、台付長頸壺の底部から肩までの３分の１程度の破片１点が出土している。

６．ま　と　め

本遺跡の周辺は大部分宅地化されている。このような状況の中で遺構等の確認が年々むずかしくなってきている。国分尼寺跡の範囲や伽藍配置も推定されるが、寺域占地と条里との関係を含めて、さらに検討する必要があろう。また一方、推定線を発掘調査によって実証していくことも都市化著しい本地区においては急務と考えられる。　（松本清一）

註１．地学団体研究会「新版　仙台の地学」1980

註２．経済企画庁「地形・表層地質・土じょう　仙台」1967

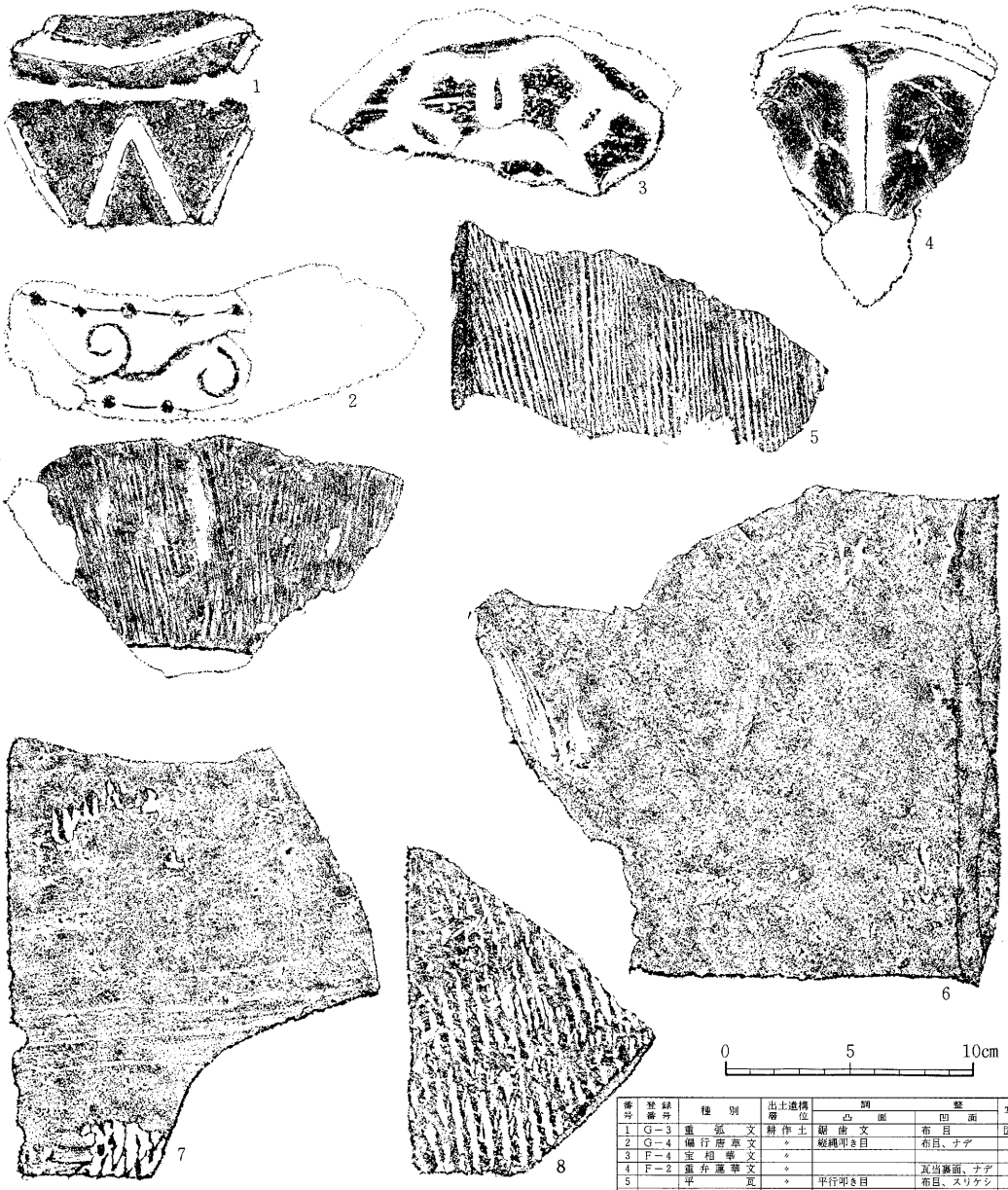
註３．松本源吉・内藤政恒「陸奥国分寺」『国分寺の研究』1938

註４．仙台市教育委員会「史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書」1969

註５．仙台市教育委員会「仙台平野の遺跡群Ⅳ～昭和59年度発掘調査報告書」1985

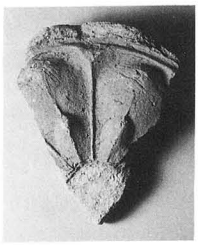
註６．註３に同じ。

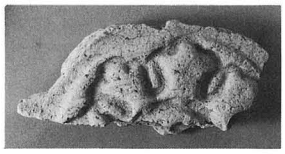
註７．伊東信雄編「陸奥国分寺跡」陸奥国分寺跡発掘調査委員会　1961



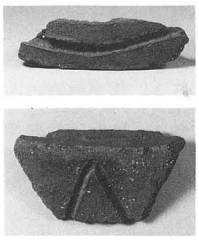
番号	登録番号	種別	出土遺構層位	調 凸面	整 凹面	写真図版
1	G－3	重弧文	耕作土	鋸歯文	布目	図版3－4
2	G－4	偏行唐草文	〃	縦縄叩き目	布目、ナデ	〃 3－3
3	F－4	宝相華文	〃			〃 3－2
4	F－2	重弁蓮華文	〃		瓦当裏面、ナデ	〃 3－1
5		平瓦	〃	平行叩き目	布目、スリケシ	〃 3－12
6		平瓦	〃	縄叩き目、スリケシ	布目、スリケシ	〃 3－6
7	F－6	道具瓦(面戸付丸瓦)	〃	縄叩き目、スリケシ	布目	〃 3－8
8	G－6	道具瓦(隅平瓦)	〃	縄叩き目・	布目、スリケシ	〃 3－11

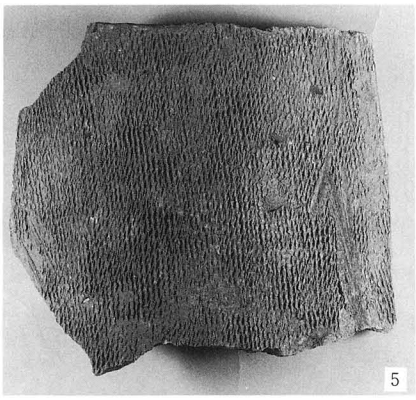
第５図　出土遺物拓影


1


2

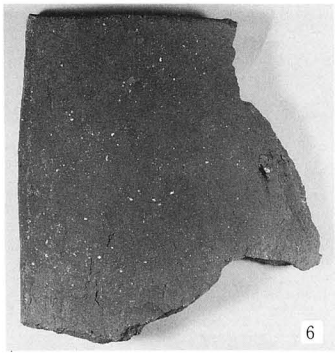
3

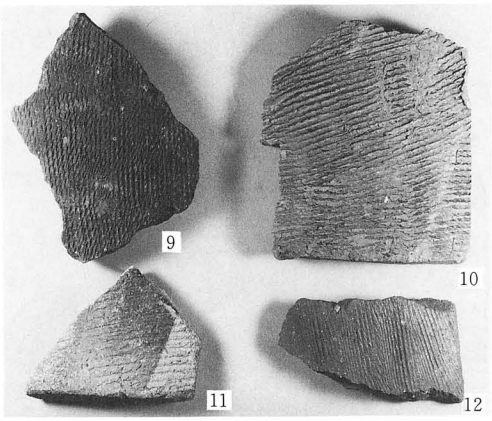

4


5

7

8


6


9 10 11 12

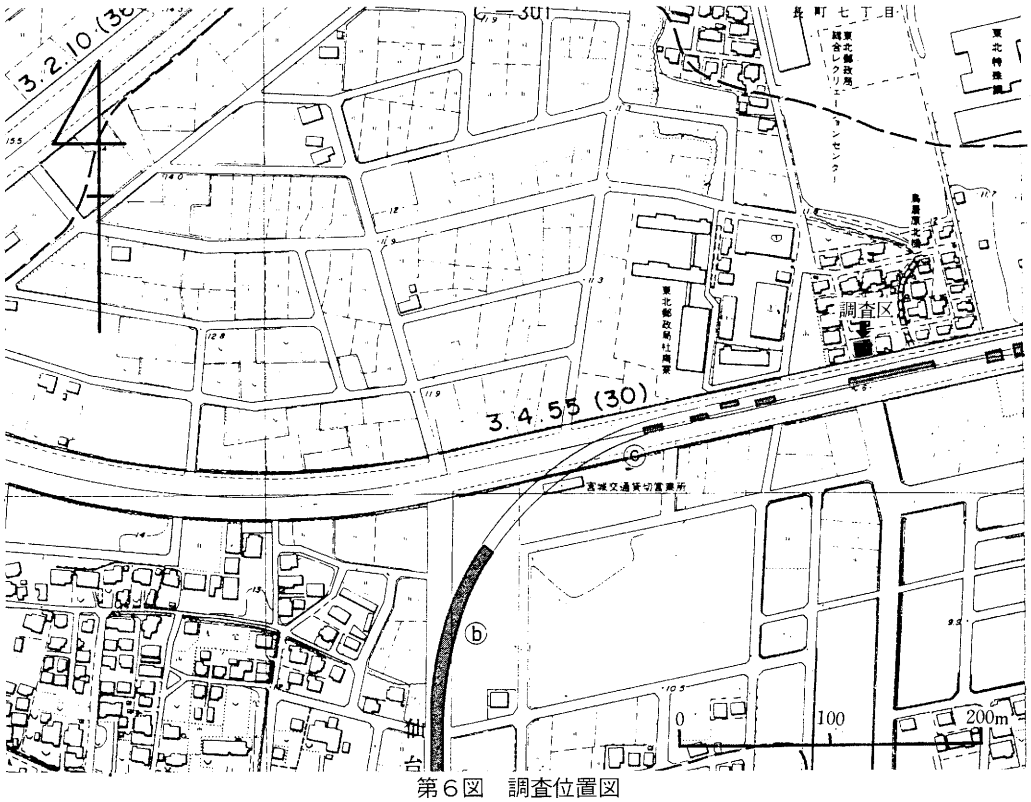
1．重弁蓮華文軒丸瓦　2．宝相華文軒丸瓦　3．偏行唐草文軒平瓦　4．重弧文軒平瓦
7．丸瓦凸面状況　8．道具瓦(面戸付丸瓦)　9～12．平瓦凸面状況　11．道具瓦（隅平瓦）

写真３　出土遺物写真

〔3〕富 沢 遺 跡

1．遺跡の位置と環境

富沢遺跡（仙台市文化財登録番号Ｃ－301）は、宮城県仙台市の南西部、仙台市富沢にある。南に名取川によって形成された自然堤防、北に青葉山丘陵中の三神峯・大年寺などを望み、東に仙台平野、西に青葉山・高館丘陵をもつ地域で、面積は約800,000㎡である。近年、仙台市街地周辺のベットタウン化は著しく、市の北西部及び南西部の丘陵地帯を中心に開発が行なわれてきたが、最近は南部及び東南部の沖積平野へも開発の手は及んできている。本遺跡も最近までは大部分水田を中心に畑地などが多い地域であった。近年、土地区画整理事業の結果、盛土による宅地化、高速鉄道（地下鉄）建設が進むに伴い商業地化が進み、高速鉄道開業後はさらに促進される地区である。歴史的環境では、山田上ノ台遺跡・北前遺跡といった後期旧石器時代の遺跡を西の丘陵地帯にもち、同丘陵地帯には、既述の二遺跡の他三神峰遺跡、人来田遺跡等が、南には六反田遺跡などの縄文時代の遺跡がある。弥生時代の遺跡の南小泉遺跡・西台畑遺跡が北東にある。また、南南東には、安久東遺跡、南には、雷神山古墳などの遺跡がある。加えてこの遺跡近辺では、下ノ内遺跡から縄文中期末葉の住居跡・伊古田遺跡では後期の大型土偶などが出土している。また、裏町古墳からは埴輪などが出土している。中世では富沢館跡、



第６図　調査位置図

・近世では茂ケ崎城跡がある。

2．調査に至る経過

地区は富沢遺跡の中央部よりやや北東より、仙台市長町７丁目23～12にある（第６図）。この位置は、国鉄長町駅の西南1.1kmにあたる。昭和60年12月12日付で、仙台市宮城野８丁目７番の石塚恒夫氏より富沢遺跡の発掘届が提出された。申請地が富沢遺跡に位置し、東南側にほぼ隣接する地区の調査で、中世・平安時代及びそれ以前の水田跡が検出されていたことなどから、遺跡の範囲確認を目的とした発掘調査を実施することで申請者の承諾を得、同年５月８日から調査を実施した。調査区は敷地西側に2.5m×７ｍの南北に長い形とし、盛土排土後は西壁に土層観察と排水を兼ねたトレンチを幅30cmで設定した。

3．基 本 層 位

この地点は、近年水田に盛土をした住宅地のため、盛土が60～90cmもある。その下に５層確認された。第１層は旧水田耕作土とその床土から成る粘土層である。２層も粘土層であるが、２層からは灰白色火山灰を帯状に検出している。３層、５層には植物遺体を多く含む。４層には、酸化鉄の集積が帯状に見られる。

4．発見遺構と遺物

今回の調査では、３層上面で溝跡を検出した。尚、調査区が狭いため、その用途は不明である。

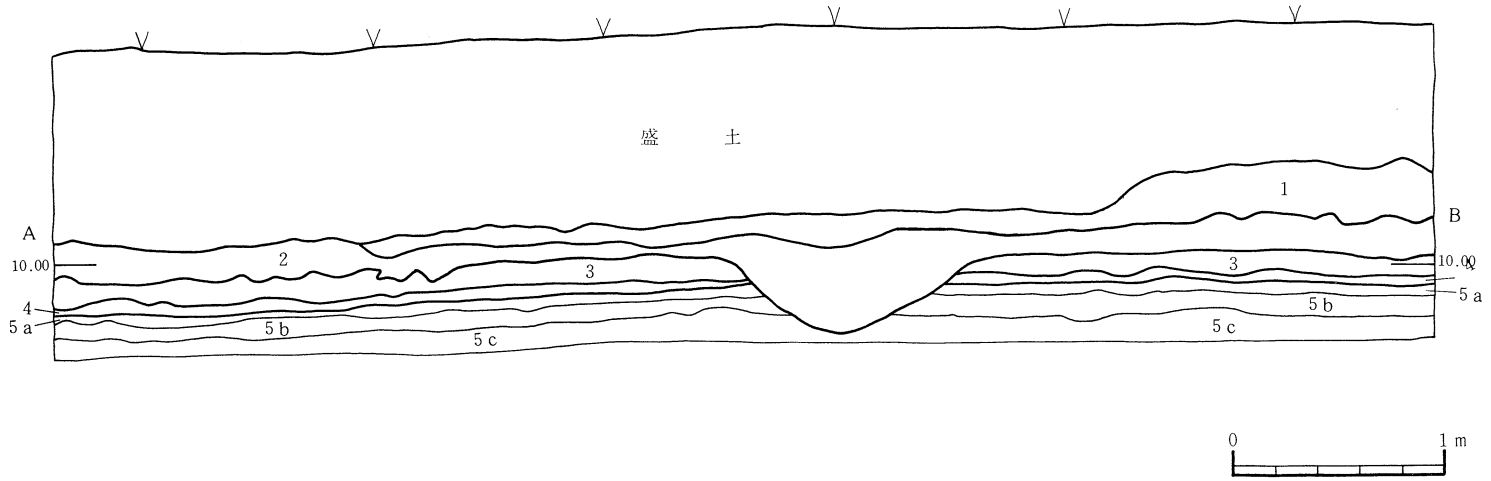
第３層検出溝跡。第３層上面で、溝跡のプランが確認されたため確認を行なった。東西方向にＮ－46°－Ｗ、上端幅1.3ｍ、下端幅0.25mを計る。平面形はやや弧状であり、堆積土は単層で上層の２ａ層である。深さは、38cmであり出土遺物はない。２ｂ層に灰白色火山灰粒（径１cm前後）が含まれており、下層のこの溝は、平安時代と同時期か古いものと考えられる。しかし出土遺物がないため、その時代決定は不明である。

5．ま　と　め

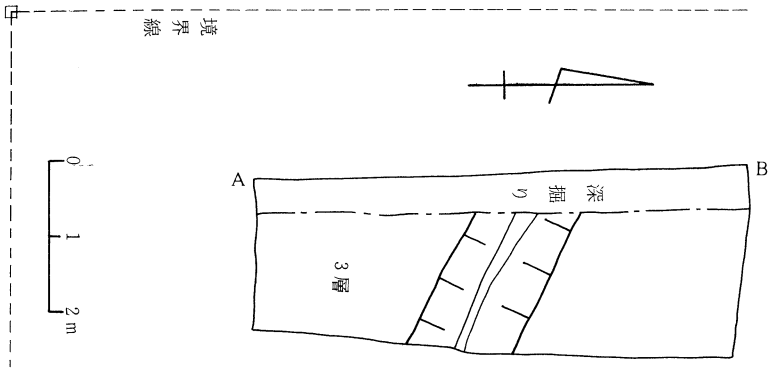
今回の調査は、富沢遺跡の範囲確認を目的として実施した。調査面積等の制約もあり、水田跡の区画、形状等は確認されなかった。しかし、高速鉄道関係遺跡の調査で水田跡を検出しており、同類の土壌とおもわれるものも確認されたので、その広がりも確認できた。また、４層面で酸化鉄の集積が認められることから、この上層には、水田跡があったと思われる。

富沢遺跡の発掘調査も30カ所以上になり、重層構造を成す水田跡が存在するのは確実である。来年度以降も調査件数の増加が予想される。これまでの各調査地点の成果を一括して整理、統合し今後の資料とすることを必要と感ずる。

（松本清一）



層　位	土　　色	土　性	備　　考
1	7.5ＹＲ４／１褐灰色	粘　土	酸化鉄を粒状に含む
2	7.5ＹＲ２／１黒　色	粘　土	7.5ＹＲ４／１をブロック状に含む
3	7.5ＹＲ３／１黒褐色	粘　土	7.5ＹＲ５／２灰褐色を帯状に含む
4	10ＹＲ３／７黒褐色	粘　土	酸化鉄を粒状に含む
5　a	10ＹＲ２／１黒　色	粘　土	植物繊維を含む
5　b	10ＹＲ２／１黒　色	粘　土	10ＹＲ７／２にぶい黄橙色を少量含む
5　c	10ＹＲ２／１黒　色	粘　土	植物繊維を多量に含む



第７図　平・断面図

写真４　溝掘上げ状況

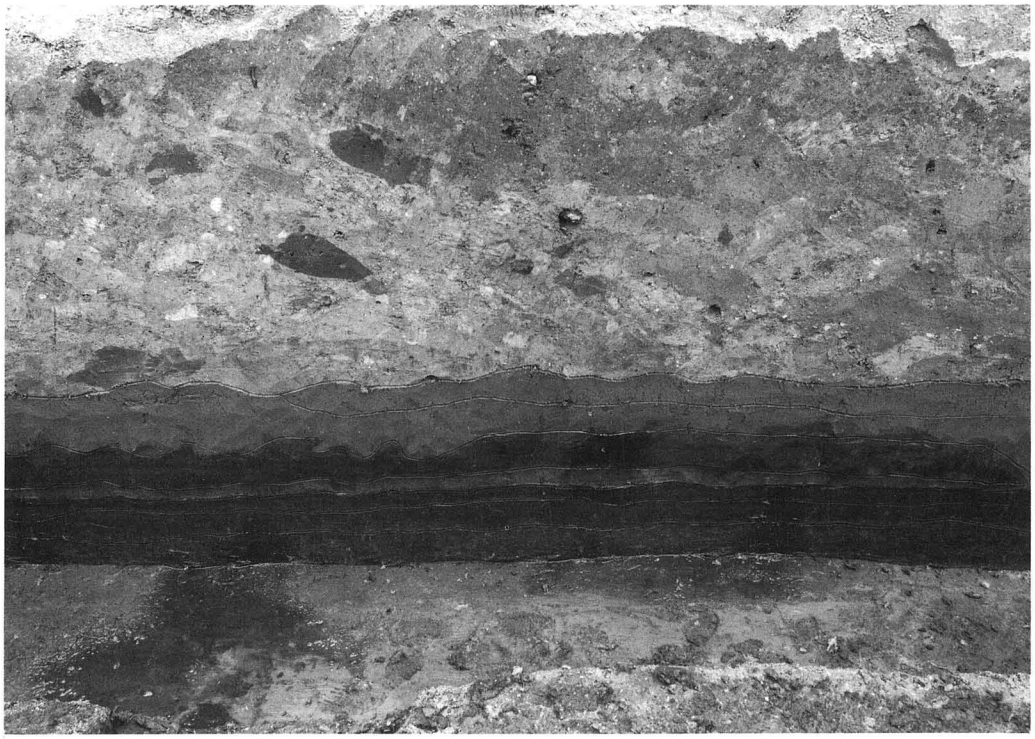


写真５　断面の状況

〔4〕郡山遺跡

郡山遺跡は国鉄長町駅東側で、広瀬川と名取川に囲まれたところに位置している。陸奥国府多賀城が造営される前の官衙及び寺院跡が発見されており、年代は7世紀末～8世紀初期が考えられている。今回はこの遺跡中で5件の建築に伴う調査を実施したので、以下でその略報を行ない、詳細は「郡山遺跡Ⅶ」で報告したい。

1．第60次調査

方四町Ⅱ期官衙の中央部、中軸線の直ぐ東側に位置し、官衙の中央部分に関する遺構の存在が予想された。ここに住宅の新築が予定されたため、緊急調査を実施した。その結果、掘立柱建物跡1棟が発見された。

2．第61次調査

方四町Ⅱ期官衙中央北寄りの地区で、昭和57年度第24次調査C区の北側に隣接している。Ⅰ期・Ⅱ期官衙の内部区画の塀跡や建物跡等の存在が予想された。ここに共同住宅の新築が予定されたため、緊急調査を実施した。その結果、Ⅰ期官衙の材木列による塀跡、竪穴住居跡、Ⅱ期官衙の一本柱列による塀跡、溝跡、掘立柱建物跡などが発見された。

3．第62次調査

寺院推定域内の北西地区にあたり、寺院中枢に関わる遺構の存在が予想された。ここに住宅の新築が予定されたため、緊急調査を実施した。その結果、寺院中枢を取り囲むと考えられる材木塀、塀に付設された門跡を発見し、寺院中枢域を推定する大きな成果を得た。

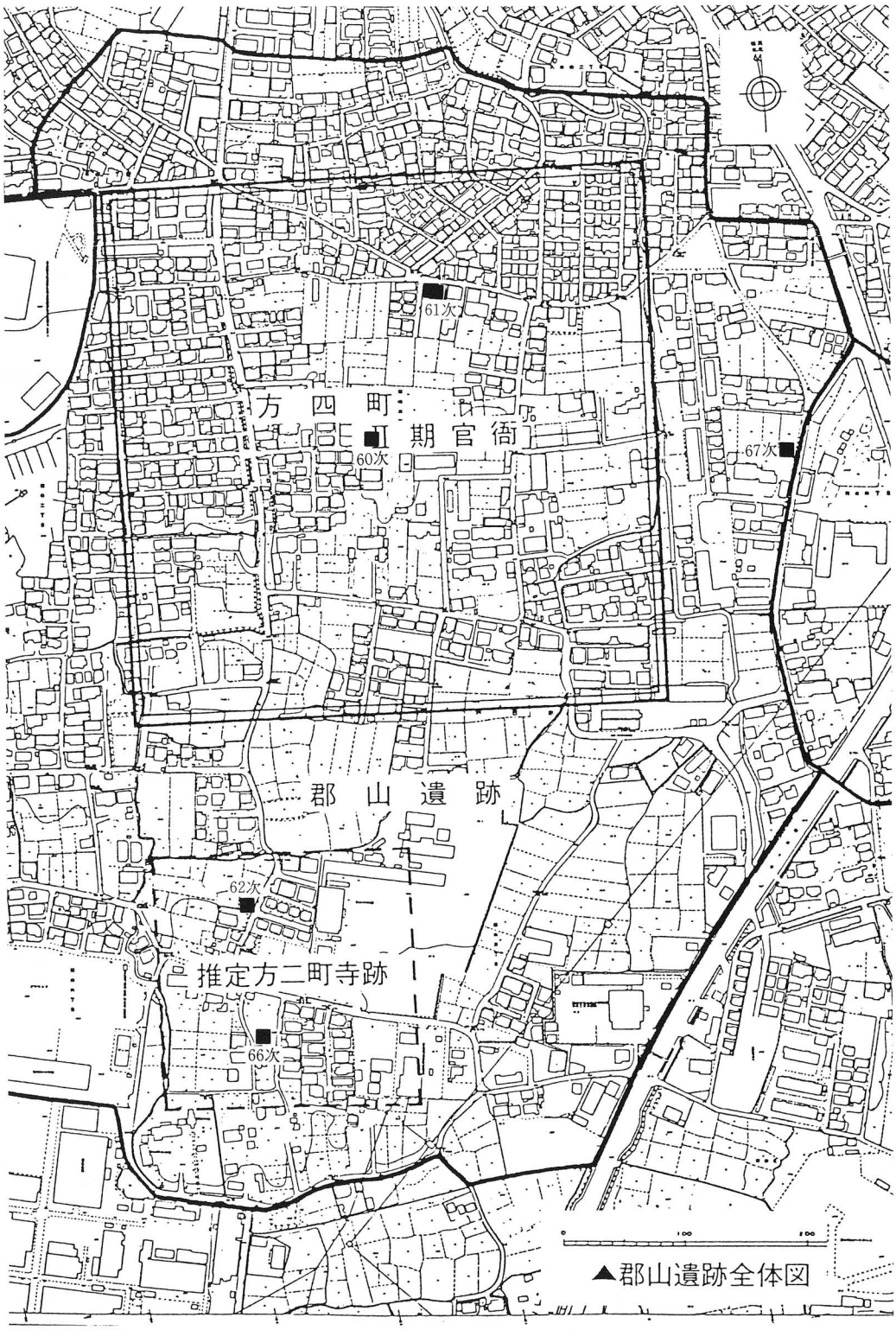
4．第66次調査

寺院推定域のほぼ中央部、推定中軸線の直ぐ西側に位置するところであり、主要な伽藍の存在が予想された。ここに住宅の新築が予定されたため、緊急調査を実施した。その結果、南北方向の溝跡2条、溝状遺構1条が発見され、溝跡からは軒丸瓦7点を含む瓦が多量に出土した。建物跡の存在を直接示す遺構の発見はなかった。

5．第67次調査

方四町Ⅱ期官衙の東辺中央より約90m外にあたる。ここに共同住宅新築が計画されたため緊急調査を実施した。郡山遺跡の官衙跡関連より、隣接する北目城跡に関係する遺構の存在が予想される箇所であったが、遺構は発見されなかった。

（結城慎一・木村浩二・松本清一）



第８図　郡山遺跡と調査位置

文 化 財 課 職 員 録

課長　早坂春一
管理係　係長　佐藤政美
　　主事　岩沢克輔・山口　宏
　　技師　桑島栄男
調査係　係長　佐藤　隆
　　主事　結城慎一・木村浩二・篠原信彦・佐藤　洋・金森安孝・佐藤甲二・吉岡恭平
　　工藤哲司・渡部弘美・主浜光朗・斎藤裕彦・長島栄一・及川　格・平間亮輔
　　佐藤　淳・渡部　紀・佐藤良文・高橋　泰・鈴木善弘・松本素明
　　教諭　小野寺和幸・佐藤美智雄・千葉　仁・松本清一
　　派遣職員　高橋勝也

「仙台平野の遺跡群」発掘調査報告書刊行目録

第37集　仙台平野の遺跡群Ⅰ―昭和56年度発掘調査報告書―（昭和57年３月）
第47集　仙台平野の遺跡群Ⅱ―昭和57年度発掘調査報告書―（昭和58年３月）
第65集　仙台平野の遺跡群Ⅲ―昭和58年度発掘調査報告書―（昭和59年３月）
第75集　仙台平野の遺跡群Ⅳ―昭和59年度発掘調査報告書―（昭和60年３月）
第87集　仙台平野の遺跡群Ⅴ―昭和60年度発掘調査報告書―（昭和61年３月）
第97集　仙台平野の遺跡群Ⅵ―昭和61年度発掘調査報告書―（昭和62年３月）

仙台市文化財調査報告書第97集

仙台平野の遺跡群 Ⅵ

昭和62年3月

発行 仙台市教育委員会
仙台市国分町3－7－1
仙台市教育委員会社会教育課

印刷 ㈱東北プリント
仙台市立町24－24 TEL263－1166